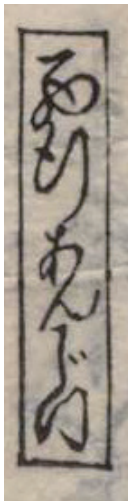
問題1

Aの図は江戸時代に刊行された『吉野山独案内』という、大和国（現在の奈良県）の吉野山をとりあげた当時のガイドブックの挿絵です。これを見て、空欄の字を埋めてみよう。



①
清
水

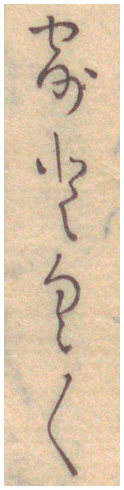
②
西
行

A

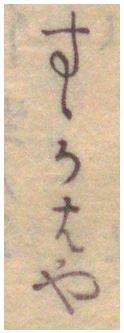
年　組　番　名前

問題2

Bの図は、江戸時代に松尾芭蕉が書いた紀行文『野ざらし紀行』の一部分です。これを見て、空欄の字を埋めてみよう。



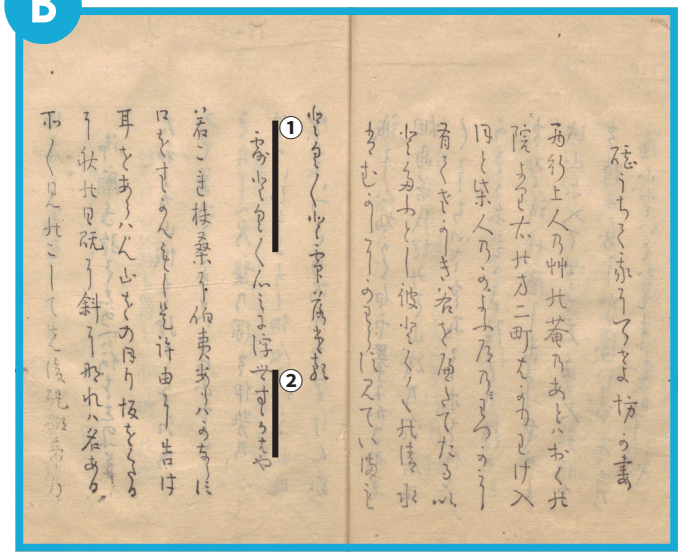
①
露
〳〵



②
丶

心みに浮世

B



点

解答

問題1：①「こけ」②「あんじつ」
「こけ清水」「西行あんじつ」

問題2：③「とく〳〵」④「すゝかはや」
「露とく〳〵心みに浮世すゝかはや（すすがばや）」

教材について

ねらい：くずし字に触れながら、和本の種類の豊かさや、松尾芭蕉の旅への思いを実感する。

時間配分：トータル25分。授業時間：5分（くずし字の説明）
問題を解く時間：20分（問題1・2）

対象教科：国語、社会、書写・書道

問題解説

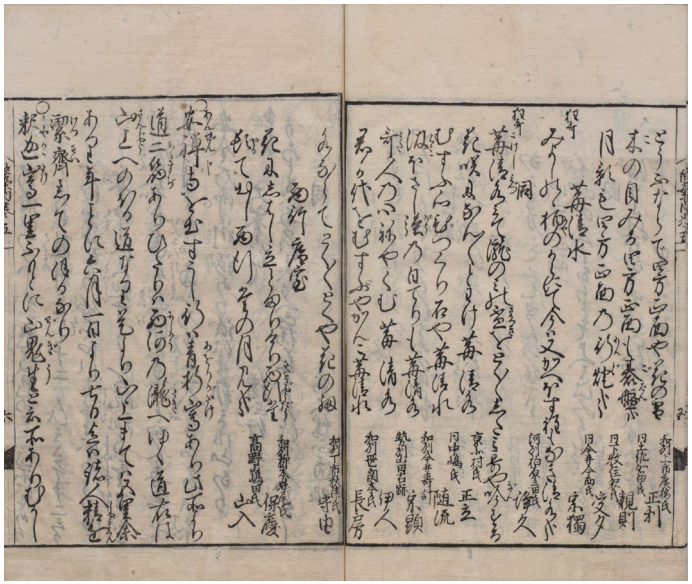
問題1は江戸時代に刊行された『吉野山独案内』という、大和国（現在の奈良県）の吉野山を取り上げた地誌の挿絵です。そして**問題2**は俳諧師・松尾芭蕉が実際に吉野山を旅した時に詠んだ句になります。

問題1

①**「こけ」**は現在でも使用されているひらがなと同じなので、わかりやすかったかもしれません。それに続く「清水」ですが、「清」は書写の毛筆で行書に取り組む時に、書いたことのある人もいるでしょう。「水」のくずし字も特徴的ですね。②「西行」は『新古今和歌集』で有名な歌人、西行法師。**「あんじつ」**は「庵室」。**「つ」**は見慣れないかたちをしていますが、現在、ひらがなとして用いている「つ」と同じく**「川」**が字母になっているくずし字です。西行法師は、吉野山の山奥に自身の草庵をもち、そこで過ごしながら和歌を詠みました。「こけ清水」＝「苔清水（こけしみづ）」は、その庵近くの湧き水です。かつて西行法師が「とく〳〵と落る岩間の苔清水くみほす程もなき住居哉」と詠んだと伝えられています。『吉野山独案内』には吉野山の名所だけでなく、そこにちなんだ和歌や俳諧が紹介されています。和歌や俳諧は、名所のイメージを形作るのに欠かせないものでした。

そして、面白いのは刊行当時の俳諧愛好者の人々のものと思われる句が、多数掲載されているところです。名所の案内文や古歌とともに、自分の俳諧が出版されるのですから、掲載された人々にとっては誇らしく感じられたのではないでしょうか。

江戸時代に入ると、出版文化、俳諧、そして旅と、それぞれの強みが合わさり、歌枕のイメージはより広く、楽しまれていきました。そして、松尾芭蕉の歌枕への旅を楽しみとする読者層が醸成されていきます。


『吉野山独案内』巻五　「苔清水」「西行庵室」（国立公文書館デジタルアーカイブ）

問題1　教材解説

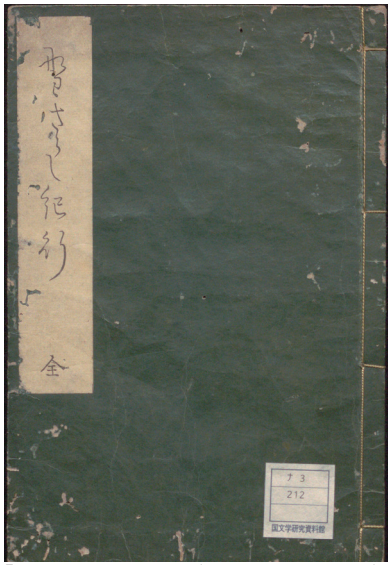
『吉野山独案内』は寛文一一年（一六七一）刊です。歌枕である吉野を題材にしたさまざまな和歌や俳諧を名所とともに紹介する、ガイドブックのような本です。教材の画像は、「国立公文書館デジタルアーカイブ」（https://www.digital.archives.go.jp/img/4287911）で公開されています。『版本地誌大系　別巻三〈古版地誌〉』（臨川書店、二〇一〇年）には、影印が掲載されていて、ページを手にとりながら内容を確認できます。

問題2

③、④ともに「踊り字」の出題です。「ゝ」その直前の字をくり返す時に使います。また「〳〵」はその前の複数分の字をくり返す時に使います。松尾芭蕉は貞享元年（一六八四）に、深川から東海道を経て、故郷である伊賀上野に向かう旅に出て、その様子を紀行文『野ざらし紀行』にまとめました。この句は、その旅

の途中、あこがれの西行法師の足跡を求めて、吉野山にある苔清水を訪れた時に詠まれたものです。③の「とくとく」＝「とくとく」は、水がしたたり落ちる様子を表す擬態語です。西行法師が詠んだと伝わる和歌にある言葉を、芭蕉も用いています。④の「すゝかはや」＝「すすがばや」は「すすいでみたいものだ」という意味。湧き水ですすぐといえば手や口などですが、ここで芭蕉が選んだ言葉は「浮世」。この世の中や人生までもすすぐことができそうだと、苔清水の清らかさに感動している様子がよくわかります。

芭蕉は、貞享五年（一六八八）の春、花見のために吉野を訪れますが、その際にも苔清水に立ち寄り、「春雨のこしたにつたふ清水かな」（『笈の小文』）の一句を詠んでいます。翌年の元禄二年（一六八九）には、西行法師が「道のべに清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ」（『新古今和歌集』）と詠んだとされる、那須の芦野にある「遊行柳」に立ち寄り、「田一枚植て立ち去る柳かな」の句を詠み、やがてその句は『おくのほそ道』に収められるのでした。


『野ざらし紀行』表紙（国文学研究資料館蔵）

西行法師は後世、和歌が歌集を通じて親しまれるだけでなく、説話や謡曲、御伽草子などの主人公としても知られており、芭蕉が旅をしていた当時には、西行法師の和歌だけでなく、その生涯をあつかう版本が出版されていました。

芭蕉が西行法師の足跡をたどり、そこで自身の句を詠み、さらにそれらが紀行文として出版されることは、俳諧を愛好し、旅にあこがれる人々に大きな影響を与えたことでしょう。

芭蕉は晩年、近江国（現在の滋賀県）の国分山の幻住庵ですごしました。幻住庵での暮らしをまとめた俳文「幻住庵記」は、元禄四年（一六九一）刊行の『猿蓑』に収められ、芭蕉の名作と評されました。

旅に生きるだけでなく、山中のひっそりとした庵での生活ぶりも、西行法師をお手本とした芭蕉。「幻住庵記」には「たま〳〵心まめなる時は、谷の清水をくみて自らかしぐ（＝炊ぐ）。とく〳〵のしづくをわびて一炉のそなへいとかろし。」と、庵近くの湧き水を描いています。

「幻住庵記」には、国分山からの眺望も描かれ、芭蕉が琵琶湖を中心に、近江の湖南にある歌枕を大パノラマとして楽しんでいたことがわかります。山中はひっそりとしており、幻住庵跡には平成に入ってから復元された庵が、芭蕉に思いをはせる人々を迎えています。

大津市国分山にある幻住庵（復元）。すぐそばには「幻住庵記」に登場する近津尾神社がある。

大津市国分山の「とくとくの清水」

問題2　教材解説

『野ざらし紀行』は出版され、読者の旅へのあこがれをさらに呼びます。今回、教材として用いたのは、「国書データベース」（https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/200031139/）で公開されている国文学研究資料館蔵本で、明和五年（一七六八）の刊行のものです。（担当：永田郁子）